

愛媛大学医学部第二内科

# 同窓会ニュース

平成23年12月 No.42

## 卷頭言

### 継続は力なり

市立八幡浜総合病院

上 村 重 喜

平成23年10月3日、月曜日、午前10時前、患者に心エコー検査の説明をしていたところ外線電話が入ってきた。第2内科からであった。電話にててみると、片山先生からであった。「今、いいでしょうか。」から始まった。勤務中には、當時ピッチに電話に入るため、余程のことが無い限り、いつでもOKである。同窓会ニュースの原稿依頼であった。詳しくは、メールを送付することであった。片山先生は、同じ八幡浜市の出身であり、時に地元の患者を紹介して頂いている第2内科の頼もしい後輩である。基本的に、診療依頼を含め、余程の事が無い限り断ることも無い外線電話依頼に対し、いつも簡単にOKの返事をしてしまった。メールは、通常3～4日に1回開くようにしているが、片山先生からのメールが入っていた。開けてみて、ビックリしたが、後の祭りであった。同窓会ニュースの卷頭言ではないか。通常は、ここは自分には、[関係ない部分]である。私が、市立八幡浜病院の院長になってしまったため、このようなことになったのであろう。第2内科の、高名な諸先輩の卷頭言に比べ、まず思いついたのが「人生暇つぶし」、「小さな親切、大きな下心」であった。私の学生時代の友人が言っていた言葉で、自分の生き方にも比較的合っている、心地の良い[ことば]ではあるが、さすが同窓会ニュースには、適していないことは考える余地もなかった。以後、卷頭言を思いつくのに、しばし時間を要することに気がついた。程なく、「石の上にも3年」と「継続は力なり」との言葉が思い浮かんだ。2つの言葉の内容は、一連の経過上の表現でもあり、まずは3年そして10年と自分なりに理解している。50歳も半ばを迎えた自分のことを考えると、そろそろ後者を選択してもとの思いで卷頭言とした。この間、自分自身の納得がいくのに3週間が経過した。いよいよ、原稿作成である。しかし、私の中では、「人生暇つぶし」と「継続は力なり」とは、日本語での表現に違いはあるが、非常に近いニュアンスを持っていることを付け加えてさせて頂く。

前置きが長くなってしまったが、「石の上にも3年」は、有名な言葉ではあるが、小

生が第2内科に入局して1年目の研修医の時に、当院大学院生であった県立中央病院の岡山英樹先生より頂いた貴重な言葉である。「上村、医者は最初の3年で決まるぞ。石の上にも3年や。」私は、第2内科医局の入り口の扉の近くで、とても素直に拝聴したことを鮮明に記憶している心地よい想い出の一つである。現在の臨床研修制度と異なり、徒弟制度が基本にあった当時の研修医時代の一日のDutyは、まずは先輩諸先生方の晩飯の準備であった。一文の弁当、さちの焼肉、これらは学会発表した症例に匹敵するくらいインパクトの強い記憶となっている。同じ釜ではないが、同じ弁当を食って深夜遅くまで学んだことは、今のスタイルとは異なるものの、懐かしく、ほぼ現在の研修制度に匹敵する成果を出させていたように思われる。そして、私の研修医2年目は、松山日赤であった。循環器内科では、福山尚哉先生はじめ、九州大学の先生方が、大切であることは「考え方」であると常々言っておられた。君たちがここで学んで帰ることは、「考え方」が大切であるということであった。あまりにも何度も言われるので、素直に受け入れることに抵抗はなく、記憶中枢に叩き込まれた。もちろん疾患についても学んだが、「石の上にも3年」の2年目の記憶の大部分は、当時の松山日赤の病院機構と「考え方方が大切である」ということであった。いよいよ「石の上にも3年」の3年目を迎えた。私の師匠である、県立新居浜病院の西山誠一先生の門を叩くこととなった。当時は、県立新居浜病院が東予救命救急センターとなって間もない時期で、フィリップス社製のバイプレーンシネアンギオ装置が入って5ヶ月目であった。松山日赤に比べるとスタッフは少なかったが、毎日が救急日で、ここで現在の基礎を築いた時期でもあった。循環器は、西山先生と私の2人、呼吸器の西谷先生が循環器の兼務で手伝ってくれた。心臓血管外科の北条先生は、頼もしい上司かつ先輩で、毎晩遅くまでICUで共に働き、深夜に及ぶPCIに付き合って頂き、IABPの挿入、操作を教えてくれた。慌ただしい3年目が終わるころ、自分自身の中にも、これで3年、岡山先生の言わされた3年が、今の自分であるのかと自覚していたようである。その後、第2内科からは、順調に若い先生方が派遣され、私も通算4年間、県立新居浜病院で勤務した。この間、自分自身の中で10年を一つの区切りとして捉えるようになっており、10年目の自分を想像するようになっていた。しかし目標があった訳ではない。医師として、現場で通用するようには考えていたが、目標を持って何かをするには、「人生暇つぶし」とは、あまりにも違いすぎる。その後、大学に戻り、鷹の子病院に赴任した。大学では、濱田希臣先生の横の机を頂き、光栄であった。当時、WRC (Worldrally championship) を戦っていたSUBARU社製のインプレッサのレプリカ22B (車両価格500万円であったと記憶している。) を、濱田先生が購入されたのが、今でも鮮明な記憶となっている。その後、濱田先生はSUBARUフォレスターSTIを購入され、現在も市立宇和島病院の通勤途中、西予市の法華経峠（いや、チェリニ峠か）を数多くのMR、業者達のマシーンを置き去りにして駆け抜けているとの逸話を耳にしている。濱田先生からは、「Cardiologistになれ、お前はTherapistだ。しかし、現場では、それでもええかもなあ。」という有り難い言葉を頂いた。未だに、Cardiologistには程遠いことを自覚しているが、ずっと気になってはいる。

現在の病院には、平成12年4月に赴任した。現在12年目を迎えている。地元の病院に赴任し、当時院長の濱本 研先生より、「帰ってきましたね、自分の病院に」と言わされた。自分としても、移動は無いのかと漠然と考えた。この時、「10年後はどうなっているのかな、今まで通りのスタイルでやり続けてみるか。」と考えた。ここでは、第2内科の高橋光司先生と共に働くことになった。高橋先生は、皆様もご存知の通り、非常に熱心で、かつ信念を持って働く先生です。医療に対しての考え方方が、比較的小生と似ていたため、一緒に働くのがとても心地よかったです。よく、いろんな症例について相談し、指導頂いた。また、医療のあり方、病院についても語り合った。基本的には、現在もその延長上であり10年を越えた。この10年間というスパンは、「継続は力なり」と言われる時期に該当すると考える。継続とは何かという問いに対しては、継続こそ経験であり、経験の積み重ねは、時として意思決定におけるbasic potentialの一つであると理解している。

平成12年の赴任当時には、常勤医が35名いた当院だが、現在は24名で内科医は5名である。当院には、地域救急医療サテライトセンターが設置されており、檜垣實男先生のご配慮により、准教授の鈴木誠先生と助教の榎本大次郎先生が、応援に来て頂いている。第2内科ならびに両先生方には、深く感謝している。私の赴任時には、第2内科5名、第3内科5名で計10名の内科医師がいた。現在のような診療制度ではなく、365日救急をしていた。しかし、内科全般を診ることを主眼とし、それぞれの科とも、専門性を追求できる環境ではなかった。つまり、派遣される内科の先生方にとっては、決して都合のよい病院ではなかった。そこへ小泉内閣による、新臨床研修制度が黒船のようにやって来た。当時管理職ではなかった私は、それ程深刻には考えていないかった。しかし、その黒船による波は当院にも押し寄せた。現在の当院の状況は、ドック入りできない船が、洋上で修理しながら航海している状況である。車でいえば、何年も車検はしていない。医師免許は平等でも、東京と八幡浜では、そもそも比較するのがおかしいと思われる。ロケーションにおけるハンディがありすぎる。これは、研修医獲得における戦いの場において平等ではない（そのまんま、戦国時代である）。世界経済がグローバルな社会となり、企業が生き残るために、いろいろ戦略を練ることは、まだ理解できる。しかし、医療を中心とした福祉ならびに教育を行う上で、東京と愛媛、松山と南予が同じ保険制度のもと、競争をすることは弱者にとっては、不利である。地域枠の先生方の現場への配慮を何時の日か待ち望んでいる訳ではあるが、従来の医局制度でも、十分人は育っていたのではないかと思う。問題が起こるとは、予測済みであったにも関わらず、現在の新臨床研修制度を実行し、かつ修正しない霞ヶ関の先生方も、ある意味凄い。次の10年後には、地域枠の先生方の活躍をはじめ、小泉元総理ならびに霞ヶ関の先生方の英断が正しかったことを祈りつつも、現状を継続していくことは、暇つぶしの理論では、自分自身への説明が難しくなった今日この頃である。第2内科関連病院の中では、筆頭の苦境状態にいる私が言うのは少しおかしいようだが、第2内科ならび関連病院の今後の発展を祈念して、筆を擱かせて頂く。

## 学会記

# High Blood Pressure Research 2011に参加しました。

愛媛大学大学院病態情報内科学 長尾知明

オーランドで開催されたHigh Blood Pressure Research 2011に参加しました。ウォルトディズニーワールドドルフィンリゾートが会場でした。先輩の先生方の話ではHigh Blood Pressure Councilは、学会自体の規模は大きくなく、1つの会場で行われ、徹底的に最新の話題を討論するというような学会と聞いていましたが、今回の学会は口頭発表の会場も2つ（3つ？）あり、ポスター演題も多数で、以前とは雰囲気が変わっているようでした。

初めての国際学会ではありました、大蔵先生がすぐそばに立っておられ、ポスター発表なのでなんとなく大丈夫だろうと思っていたのですが、英語での質問は聞き取ることも答えることもなにもできず、結局、大蔵先生に頼りっぱなしになってしまいました。質問の答えに納得し、大蔵先生と握手をしていく何人かの外国人の背中を眺めるという時間がしばらく続き、安心感と無力感のなか、初めての国際学会は終了しました。

会場からディズニーワールドへ船やシャトルバスが出ていたため、3 Dayパスポートを購入し、学会が終わると大蔵先生とともにエプコット、ハリウッドスタジオ、アニマルキングダムにも参加してきました。ディズニーは大学6年生の頃に病院見学ついでに行ったディズニーシー以来でしたが、あまり日本もアメリカも変わりが無いような気がしました。スーツ姿で、汗だくで、足が痛くなって、周りが暗くなるまで、



さまざまなアトラクションを大蔵先生と楽しむことができました。アメリカ滞在中、学会発表だけでなく、毎日の豪華な食事から朝ごはん、昼ごはん、ディズニーワールドでのコーラまで大蔵先生、本当にお世話になりました。そして、今回の発表には多くの先生方にご指導、ご鞭撻を頂き、誠にありがとうございました。この場をお借りして、お礼申し上げます（城徳先生、実験器具の使い方から動物の処置まで本当にいつもありがとうございます。）。この経験を活かし、今後も日常臨床、研究に邁進していきたいと思います。



## 学会記

# ERS2011学会記

愛媛大学大学院病態情報内科学 三 好 誠 吾

今年も、9月23日から29日まで、European Respiratory Society Annual Congress へ参加してまいりました。今年は、伊東先生と、檜垣教授に御同行頂きました（伊東先生、檜垣先生お忙しいところありがとうございました）。

今年の開催地はオランダの首都であるアムステルダムでした。ガイドブックでの予習で、北海道よりも緯度が高いということでしたので、かなり寒いのではと心配しておりましたが、比較的住みやすい環境で安心しました。アムステルダムの街は、こぢんまりとしたところで、トラムという路面電車が発達しており、ほぼこのトラムで各所へ行くことができました。学会会場も市街地からは少し外れたところにありましたが、トラムに乗って通いました。

さて、ERSはやはり国際学会ということもあって、例年大賑わいなのですが、今年もたくさんの参加者が集まっておりました。私の発表は3日目でしたので、オランダ到着翌日はレジストレーションと会場の視察をしました。今年の会場は昨年の会場よりもかなり広く一瞬凍りつきましたが、伊東先生に励まされながら、気持ちを落ち着かせて会場を後にしました。

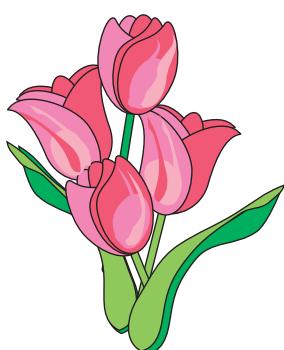
昨年に続き今年も、伊東先生と2人で緊張しながら迎えた発表でしたが、今年はあらかじめ予想質問を自分なりに考えておいたので、片言ながらいくつかの質問には答えられたのではないかと思います。ただ、やはり自分の英語力のなさは反省すべきところだとつくづく感じました。夜は、檜垣先生ご夫妻にオランダ料理を御馳走になりました。オランダは海が近いこともあります、新鮮な魚介類を食材にした料理を頂くことができました。檜垣先生、本当にありがとうございました。



オランダといえば、チューリップと風車というイメージが私の頭の中にはありました。時期的にチューリップは見ることができず、風車もアムステルダム市内には全くありませんでした。そこで、風車の見ることができる観光スポット（ザーンセ・スカンス）へ行くツアーへ参加してみました。ザーンセ・スカンスは伝統的な民家や風車を移転させて保存している、いわゆるオランダの明治村みたいなところで、17世紀ごろのオランダの風景（木造家屋、風車）を見ることができました。



大学院として大学に帰ってきてから、今年で3回目になるERSでしたが、今年も何とか無事？終わることができて良かったと思っております。最後になりますが、このような経験をさせて頂いた檜垣先生、伊東先生をはじめ、留守中お世話になりました呼吸器グループのみなさんへ深謝いたします。



## 学会記

# European Society of Cardiology 2011 in Parisに参加して

愛媛大学大学院病態情報内科学 村 上 千 佳

平成23年8月27日～8月31日までフランス・パリで開催されたESC2011に参加させて頂きました。愛媛大学からは井上先生、永井先生、原先生と私が参加し一緒に行動しました。大好きな街の一つであるパリでのESC。初めての国際学会参加ということもあり、とても楽しみにしていました。10数時間の飛行も松山→羽田、羽田→パリと順調に寝て、あっという間にパリに着いていました。セーヌ川を眺めながら石畳の街並みを歩きパリに来たことを実感し、電車を乗り継いで会場に向かいました。

国内学会とは比べ物にならない広い会場、颯爽と歩いていく様々な人種の外国人に目を奪われながら目当ての会場に辿り着きました。

まずは「CRT : optimising selection & success」を拝聴。飛行機で十分に寝たはずなのに…と眠気と闘いながら、必死で聞きました。CRTのresponse parameterやno response CRTの要因について、日循の時に勉強した内容を自分の中で整理することができました。夜はセーヌ川でのディナーも楽しみました。

パリ2日目は朝から存分に学会を満喫しました。最新の治験や薬、topicに触れ、いろいろなstudyがここから始まりやがてevidenceとなるのだなあと未来に思いを馳せました。英語の聞き取りは難しく、スライドをみながらやっと理解できる程度でした。If inhibitorであるIvabradineが取り上げられており、 $\beta$  blockerとの併用で心筋梗塞後の患者で収縮能や左室リモデリング改善するということや、安定狭心症患者で症状やQOLを改善するなど、今後本邦でも導入が期待されます。Brugada症候群で知られるJ. Brugada先生の心電図講義も拝聴しました。

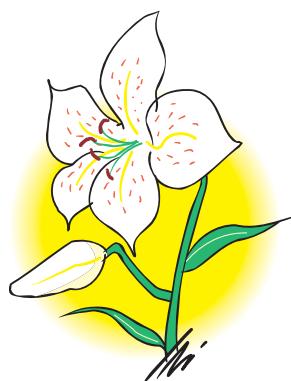
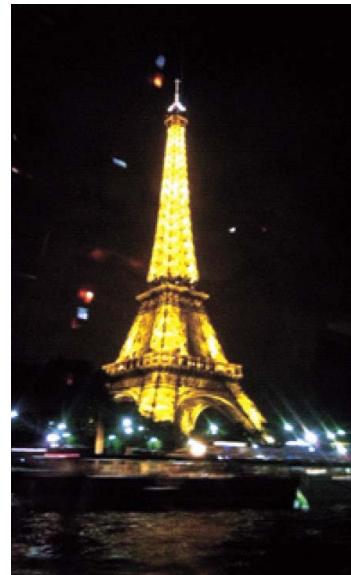
パリ3日目、4日目は学会に参加しつつ観光も楽しんで日本への帰路につきました。

今回の学会では国際学会の醍醐味を味わうとともに、discussionできる英語力を身に着けること、日頃から常に新しい文献を見て世界の流れについていくことが大事だなと感じました。それが患者さんにとって最もいい治療を選択することにもつながると思います。まだまだ学ぶべきことは多いですが、いつか国際学会でのoral発表を目指して、



日々の臨床を頑張っていこうと思います。医師となりまだ3年目というこの時期にこのような貴重な経験ができたことをとても嬉しく思っています。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった檜垣教授をはじめ、循環器グループおよび第二内科の先生方に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



## ダブル受賞のことば

# 同窓会員河野修興教授ダブル受賞のお祝い

日和田 邦 男

平成23年10月29日下記のダブル受賞に対し、広島大学学長浅原利正氏以下関係諸団体、広島大学医学部と広島大学医学部第二内科同門会代表など17氏の発起人によって、受賞記念祝賀会が盛大にとり行われました。

受賞の1つは、「平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞 開発部門」です。受賞理由は皆さんもよくご存じの間質性肺炎診断薬である血清KL-6 抗原測定試薬の開発育成です。4月に文部科学大臣から賞状を手渡される予定であったが、東日本大震災で文科省も大忙しで、賞状と記念碑は郵送されて来たとのお話がありました。KL-6 測定試薬は間質性肺炎の診断薬であり、同時に病状の重症度や経過観察上の測定意義があり、現在わが国では年間200万回以上測定されているそうです。ヨーロッパでも使用され始め、近い将来にはアメリカでも使用されるようになるでしょう。世界に向けての日本発の科学技術です。

受賞の2つ目は、瀬戸内海に浮かぶ周囲4kmほどの「大久野島毒ガス傷害研究会の活動」に対する「第63回保健文化賞」(厚生労働大臣賞、第一生命賞、朝日新聞厚生文化事業賞、NHK厚生文化事業賞)です。これは厚生労働省で最も権威ある賞だそうでして、先日皇居宮殿において天皇・皇后列席の上で賞状を授与され、天皇から長年月の活動に対しねぎらいのお言葉が賜られたそうです。昭和4年から敗戦の20年までの期間日本軍の毒ガス製造が行われ、戦時中には地図からこの島が抹消されていたそうです。この間、製造に従事した旧軍人・軍属ならびに毒ガス廃棄に関わった一般人総計約6800人が毒ガス暴露による障害を負ったと推定されています。昭和27年から、広島県立医科大学第2内科和田教授、広島大学医学部第2内科西本教授、山木戸教授、そして広島大学大学院分子内科学河野教授と4代の教授による教室あげての長年月の仕事であります。その内容は、毒ガス障害者に対する健康診断の実施、毒ガスに起因する健康被害に対する研究調査と医療活動の実践とともに後遺症の実態解明に貢献したことであります。今回河野教授が代表者として受賞されました。毒ガス障害者特有の後遺症は膿状の痰を喀出する慢性気管支炎（平均有病率67.5%）であり、肺がん発症が早期化することを疫学的に証明しています。

以上簡単にどのような賞を受賞されたのか、報告致しました。愛媛大学第2内科同窓会としても、同窓会員である河野先生にお祝いの気持ちを表したいものです。口頭では第2内科を代表してお祝いの言葉を述べてきましたが。

## 奨励賞受賞のことば

# 愛媛呼吸循環器病医学研究奨励賞受賞のことば

県立今治病院 循環器科 大 下 晃

この度は、第9回愛媛呼吸循環器医学研究奨励賞を頂き、誠にありがとうございました。昨年に引き続きこの賞をいただけたことに大変驚き、そして大変感謝しております。今回は「各種モダリティを用いたDES再狭窄例の検討」という題名で発表させていただきました。近年薬剤溶出性ステント（DES）の登場により再狭窄は減少してきていますが、それでも約10%に再狭窄が存在します。現在のところDES再狭窄に対する治療は確立しておらず手探り状態ですが、病変に応じた治療法があつてよいのではないかと我々は考えております。当院では以前より血管内視鏡を用いて、DES留置慢性期の内膜の状態を評価し、その中でステントの種類により血管に及ぼす影響が違うことを報告してきました。これは、ステントに塗布された薬剤の種類の違いと薬をぬりこむためのポリマーの違いによることがわかってきてています。我々はDES留置後に再狭窄を起こした病変についても血管内視鏡などの各種モダリティを使用することで、ステントの種類によりその病変に違いがあることがわかり今回の発表となりました。その中で特に第一世代のDESとされるCypherステントは、炎症性plaqueが関与した再狭窄病変をときに認め、TAXUSステントではフィブリンを中心とした軟らかい再狭窄病変を示す、という興味深い所見がえられました。

今回の発表におきましては、多数の先生方に興味を示していただき、そして考えさせられる質問を多数いただきありがとうございました。そして最後にこの研究をサポートしてくださった県立今治病院の先生方ならびにスタッフの方々に感謝いたします。



## 研修医奨励賞受賞のことば

# 日本循環器学会 第98回中国・四国合同地方会

愛媛大学大学院病態情報内科学 木下 将城

平成23年5月13・14日に日本循環器学会第98回中国・四国合同地方会が徳島のあわぎんホールで開催され光栄にも参加させていただきました。「心室細動からの蘇生に成功し、植込み型除細動器による二次予防を行った若年性筋強直性ジストロフィーの1例」という演題で研修医奨励賞を頂くことができました。今回このような発表の機会を頂けた上に、上記の賞を頂くことができ、非常に光栄に思っております。

私的なことになりますが、私は愛媛大学で1年目、2年目（地方病院勤務もあり）ともに研修させてもらっています。1年目の3ヶ月間、2年日の大半を第二内科で勉強させてもらっています。1年目の時から指導医の西村和久先生を始め、数々の第二内科の先生方に丁寧に指導（飲み会を含めて）していただき2年目以降もここで勉強していくことを決めました。

実は、1年目のときから研修医奨励賞を狙って熱い指導の下、学会に参加していましたが、あえなく撃沈しておりました。そのたびに何が自分に足りないのかを考えさせられ、経験を増すにつれて自分自身でも少しずつ質疑応答が上手になっているのを感じました。それでもまだまだですが（笑）。これも指導医の先生のやさしく、そして厳しい指導があればこそだと思います。そういう意味でも研修医奨励賞を受賞したことはうれしく、指導医の先生へ少しばかりですが、恩返しができたのではないかと思っています。

学会に参加することで症例について深く探究し、それを還元することの楽しさ、難しさを学べました。まだまだ研修の身であり勉強する毎に新しい知識が付き、探究することの楽しさを少しばかりですが感じることができました。さらに自分で文献を調べる力と疑問や治療法に困ったらすぐに文献を調べる癖をつけることができました。今後も機会があれば学会に数多く参加したいと思います。

今はまだ、指導医の先生方に演題を用意してもらっています。その演題で賞を取ったという状態で恥ずかしい限りですが、今後は少しずつでも自分で症例や臨床研究等を用意し、他施設の先生方と有意義なディスカッションができるように頑張りたいと思います。そして、AHA, ESCなどの著名な国外学会で自分の発表ができるようになりたいと思っています。

最後になりましたが、今回このような貴重な経験をさせて頂き、第二内科檜垣教授はじめ、第二内科の先生方には心から感謝しております。また、私の入局を歓迎していただきありがとうございました。今後とも第二内科で頑張らせていただきます。

## 関連病院業績集

### □ 宇和島社会保険病院

#### 日本文原著論文

1. 佐々木 修, 林 豊, 西川昭彦, 山内将志, 若山かおり

宇和島社会保険病院における心臓リハビリテーションとしての温熱療法の現状  
南予医学雑誌 11 : 12-17, 2010.

### □ 県立今治病院

#### 英文原著論文

1. Kodama K, Komatsu S, Ueda Y, Takayama T, Yajima J, Nonto S, Matsuoka H, Saito S, Hirayama A.

Stabilization and regression of coronary plaques with pitavastatin proven by angioscopy and intravascular ultrasound.

Circ J 74 : 1922-1928, 2010.

#### 英文症例報告

1. Matsuoka H, Kawakami H, Ohshita A, Kohno T, Shigemi S, Okayama H, Higaki J. Bare metal stent implantation for in-stent restenosis with a drug eluting stent.

J Cardiol 55 : 135-138, 2010.

#### 日本文原著論文

1. 松岡 宏, 長尾充展, 川上秀生, 望月輝一

64列MDCTの安静時心筋イメージによる心筋虚血検出の試み  
脈管学 50 : 157-162, 2010.

#### 日本文症例報告

1. 篠 厚, 中井康成, 川上秀生

心臓カテーテル検査後に外陰部動脈仮性瘤を発症した1例  
心臓 42 : 897-900, 2010.

2. 河野珠美, 川上秀生, 大下 晃, 藤田鉄平, 松岡 宏

一般市民によるAED使用により救命し得た急性心筋梗塞の1例

臨床今治 22 : 21-233

3. 松岡 宏, 川上秀生, 河野珠美, 川上大志, 西村和久, 大木元明義, 大塚知明, 岡山英樹, 檜垣實男  
ニコチンガム（ニコレット）依存症にバレニクリン（チャンピックス）が有効であった1例  
日本禁煙学会雑誌 5 : 90-93, 2010.

### 日本文著書

1. 松岡 宏  
ステント血栓症：興味深い症例  
心臓血管画像MOOK 4 p69-73
2. 川上秀生, 大下 晃, 河野珠美, 藤田鉄平, 松岡 宏  
六甲カルディアックセミナー  
相澤忠範, 神原啓文 編集  
血管内視鏡から診たDES留置部位の慢性期血管壁性状について  
－ベアメタルステント, シロリムス溶出ステント, パクリタキセル溶出ステントの比較－  
第一世代DES (Drug Eluting Stent) の総括p21-32
3. 松岡 宏  
冠動脈での位置情報の把握と記録 p26-29
4. 川上秀生  
吸引カテーテルを用いた手技 p42-43  
冠動脈バイパスグラフトの評価 p96-101  
血管内視鏡最新診療ガイド；Medical View社

### 愛媛県立新居浜病院

#### 英文原著論文

1. Sueda S, Kohno H, Oshita A, Fukuda H, Kondou T, Yano K, Ochi T, Uraoka T.  
Coronary abnormal response has increased in Japanese patients : Analysis of 17 years' spasm provocation tests in 2093 cases.  
J Cardio155 : 354-361, 2010.

## 英文症例報告

1. Kohno H, Sueda S, Nakamura S.

Effective use of the balloon deflection technique for severely angulated bifurcation lesions : a case report.

J Invasive Cardiol 22 : E141-143, 2010.

## ■ 大阪成人病センター

### 英文原著論文

1. Koga M, Murai J, Saito H, Mukai M, Matsumoto S, Kasayama S.

Glycated albumin levels are higher relative to glycatedhaemoglobin levels in gastrectomized subjects.

Ann Clin Biochem 47 : 39-43, 2010

2. Koga M, Saito H, Mukai M, Matsumoto S, Kasayama S.

Glycated albumin and glycated hemoglobin are differently influenced by endogeneous insulin secretion in patients with type 2 diabetes mellitus.  
Diabetes Care 33 : 270-272, 2010

3. Koga M, Saito H, Mukai M, Matsumoto S, Kasayama S.

Influence of iron metabolism indices on glycatedhaemoglobin but not glycated albumin levels in premenopausal women.

ActaDiabetol 47 (Supple 1) : 65-69, 2010.

4. Koga M, Murai J, Saito H, Mukai M, Kasayama S.

Serum glycated albumin, but not glycated hemoglobin, is low in relation to glycemia in hyperuricemic men.

ActaDiabetol 47 : 173-177, 2010.

5. Koga M, Murai J, Saito H, Mukai M, Kasayama S.

Serum glycated albumin levels, but not glycated hemoglobin, is low in relation to glycemia in non-diabetic men with nonalcoholic fatty liver disease with high alanine aminotransferase levels.

Clinical Biochemistry 43 : 1023-1025, 2010.

6. Koga M, Murai J, Saito H, Mukai M, Kasayama S, Imagawa A , Hanefusa T.

Serum 1,5-anhydroglucitol levels in patients with fulminattye 1 diabetes are lower than those in patients with type 2 diabetes.

- Clinical Biochemistry 43 : 1265–1267, 2010.
7. Koga M, Murai J, Saito H, Mukai M, Kasayama S.  
Serum glycated albumin levels, but not glycated hemoglobin, is low in relation to glycemia in men with hyprtytihlyvrtifrmis.  
J Diabetes Invest 1 : 202–207, 2010.
8. Koga M, Murai J, Saito H, Mukai M, Kasayama S.  
Habitual intake of dairy products influences serum 1,5-anhydroglucitol levels independently of plasma glucose.  
Diabetes Res Clin Pract 90 : 122–5, 2010.

### 日本文原著論文

1. 古賀正史, 船越俊幹, 大崎 匡, 村井 潤, 斎藤 博, 向井幹夫, 平田陽彦,  
立花 功  
正常呼吸機能例において肺活量と骨密度は正相関する  
Osteoporosis Japan 18 : 452–454, 2010.
2. 平田陽彦, 立花 功, 船越俊幹, 大崎 匡, 村井 潤, 斎藤 博, 向井幹夫,  
笠山宗正, 川瀬一郎, 古賀正史  
呼吸機能と骨密度の関連－特に正常呼吸機能例における解析－  
日本呼吸器学会雑誌 48 : 127, 2010.

### 日本文症例報告

1. 向井幹夫  
術中に血圧上昇をきたし肺水腫を呈した症例  
第95回オンライン症例検討会 (2010. 02. 01)  
武田薬品工業 Medical Executive Lounge電子版  
<http://www2.takedamed.com/content/index.html>

### 日本文総説

1. 向井幹夫  
生活習慣病とアディポネクチン－善玉脂肪とアディポネクチンの関係－  
成人病 50 : 11–13, 2010.

## 国立病院機構愛媛病院

### 英文原著論文

1. Funada J, Takata Y, Hashida H, Matsumoto Y, Sato S, Hiasa G, Inoue K, Higaki J, Okayama H.

Dysfunctional Central Hemodynamic Regulation After Daily Meal Intake in Metabolic Syndrome.

Atherosclerosis 210 : 268-273, 2010.

2. Funada J, Dennis AL, Roberts R, Karpe F, Frayn KN.

Regulation of subcutaneous adipose tissue blood flow is related to measures of vascular and autonomic function.

ClinSci 119 : 313-322, 2010.

3. Morioka N, Funada J, Takata Y, Hashida H, Iwata T, Higaki J, Okayama H.

Influence of meal intake on pulse wave indices in type 2 diabetes.  
Hypertens Res 33 : 743-747, 2010.

### 英文症例報告

1. Hashida H, Funada J, Morioka N, Iwata T.

The lurking potential of tangential forces : a case of an arteriovenous shunt developed by percutaneous coronary intervention for the septal branch.  
J Cardiol 1 : e1-e5, 2010.

2. Fujii A, Funada J, Morioka N, Hashida H, Iwata T, Higaki T.

A case of pulmonary stenosis after a repair for tetralogy of Fallot treated with percutaneous pulmonary valvuloplasty using a triple-balloon technique.

J Cardiol 55 : 130-134, 2010.

### 日本文原著論文

1. 藤岡紀子, 橋田英俊, 土手純治, 高石奈々, 松原美紀, 西宮由美子, 森岡紀勝, 舟田淳一, 岩田猛, 坂東裕美, 星井輝之

活動量計を用いた自宅での身体活動量の評価

日本心臓リハビリテーション学会誌 15 : 126-129, 2010.

2. 愛媛喘息研究会 : 三好誠吾, 濱田泰伸, 片山 均, 入船和典, 洲脇俊充, 中西徳彦, 阿部聖裕, 城内謙治, 山本昭彦, 加藤亜希, 濱口直彦, 伊東亮治, 西村一孝, 檜垣實男

気管支喘息におけるサルメテロール／フルチカゾンプロピオン酸エステル配合剤の相乘的改善効果と安全性の検討

新薬と臨床 59 : 103-110, 2010.

### 日本症例報告

1. 舟田 淳一, 森岡 紀勝, 橋田 英俊, 岩田 猛

Integrated Backscatter Intravascular Ultrasound (IB-IVUS) を用いた冠動脈プ

ラーク性状評価の重要性－経過中plaqueの破綻を生じた2症例－

愛媛医学 29 : 28-34, 2010.

## 日本文総説

### 1. 阿部聖裕

高齢者結核の治療上の問題点とその対策

Kekkaku 85 : 881-894, 2010.

## その他

### 1. 舟田 淳一, 高田康徳, 松本有司, 佐藤澄子, 日浅 豪, 井上勝次, 檜垣實男, 岡山英樹

メタボリックシンドロームにおける食後中心血圧調節機能障害に関する検討  
－英文原著論文紹介⑪－

Arterial Stiffness 16 : 52-53, 2010.

## 国立病院機構近畿中央胸部疾患センター

### 英文原著論文

1. Tazawa R, Trapnell BC, Inoue Y, Arai T, Takada T, Nasuhara Y, HizawaN, Kasahara Y, Tatsumi K, Hojo M, Ishii H, Yokoba M, Tanaka N, Yamaguchi E, Eda R, Tsuehihashi Y, Morimoto K, Akira M, Terada M, Otsuka J, EbinaM, Kaneko C, Nukiwa T, Krischer JP, Akazawa K, NakataK.

Inhaled granulocyte/macrophage-colony stimulating factor as therapy for pulmonary alveolar proteinosis.

Am J Respir Crit Care Med 181 : 1345-54, 2010.

2. Young LR, Vandyke R, Gulleman PM, Inoue Y, Brown KK, Schmidt LS, Linehan WM, Hajjar F, Kinder BW, Trapnell BC, Bissler JJ, Franz DN, McCormack FX.

Serum Vascular Endothelial Growth Factor-D Prospectively Distinguishes Lymphangioleiomyomatosis from Other Diseases.

Chest 138 : 674-81, 2010.

3. Nurok M, Eslick I, Carvalho CR, Costabel U, D'Armiento J, Glanville AR, Harari S, Henske EP, Inoue Y, Johnson SR, Lacronique J, Lazor R, Moss J, Ruoss SJ, Ryu JH, Seyama K, Watz H, Xu KF, Hohmann EL, Moss F  
International LAM Registry : a component of an innovative web-based

- clinician, researcher, and patient-driven rare disease research platform.  
Lymphat Res Biol 8 : 81-87, 2010.
4. Akira M, Inoue Y, Arai T, Okuma T, Kawata Y.  
Long-term follow-up high-resolution CT findings in non-specific interstitial pneumonia.  
Thorax. 2010 Nov 11 e-publication.
5. Taniguchi H, Ebina M, Kondoh Y, Ogura T, Azuma A, Suga M, Taguchi Y, Takahashi H, Nakata K, Sato A, Takeuchi M, Raghu G, Kudoh S, Nukiwa T  
Pirfenidone Clinical Study Group in Japan. Collaborators (77) Betsuyaku T, Sugawara Y, Fujiuchi S, Yamauchi K, Konishi K, Munakata M, Kimura Y, Ishii Y, Sugiyama Y, Kudoh K, Saito T, Yamaguchi T, Mizoo A, Nagai A, Ishizaka A, Yamaguchi K, Yoshimura K, Oritsu M, Fukuchi Y, Takahashi K, Kimura K, Yoshizawa Y, Nagase T, Hisada T, Ohta K, Yoshimori K, Miyazawa Y, Tatsumi K, Sasaki Y, Taniguchi M, Sugita Y, Suzuki E, Saito Y, Nakamura H, Chida K, Kasamatsu N, Hayakawa H, Yasuda K, Saganuma H, Genma H, Tamura R, Shirai T, Shindoh J, Sato S, Taguchi O, Sasaki Y, Ibata H, Yasui M, Nakano Y, Ito M, Kitada S, Kimura H, Inoue Y, Yasuba H, Mochizuki Y, Horikawa S, Suzuki Y, Katakami N, Tanimoto Y, Hitsuda Y, Burioka N, Sato T, Kohno N, Yokoyama A, Nishioka Y, Ueda N, Kuwano K, Watanabe K, Aizawa H, Kohno S, Mukae H, Kohrogi H, Kadota J, Tokimatsu I, Miyazaki E, Sasaki T, Kawabata M.  
Pirfenidone in idiopathic pulmonary fibrosis.  
Eur Respir J 35 : 821-9, 2010.

#### 英文著書

1. McCormack FX, Sullivan EJ, Inoue Y. Lymphangioleiomyomatosis. Murray&Nadel's textbook of respiratory medicine. Saunders Elsevier p. 1496-1515, (Mason RJ, Broaddus VC, Martin TR, et al. Ed.), 2010.
2. Trapnell BC, Nakata K, and Inoue Y. Autoimmune pulmonary alveolar proteinosis. Molecular Basis of Pulmonary Disease Insights from Rare Lung Disorders. p.111 - 132. Humana Press, Springer New York Dordrecht Heidelberg London. Edited by Francis X. McCormack, MD, Ralph J. Panos, MD, Bruce C. Trapnell, MD, 2010.

**日本文著書****1. 井上義一**

IPFと肺癌合併

(VII。IPFの臨床と診断-5) 特発性肺線維症(IPF)

杉山幸比古編

P. 118～P. 123. (株)医学ジャーナル社

**2. 佐々木由美子, 井上義一**

慢性好酸球性肺炎(CEP) IV-E

肉芽腫形成性疾患

間質性肺疾患診療マニュアル P. 302-304, 南江堂

**3. 井上義一**

びまん性肺疾患の研究, 診療などの過去, 現在そして未来への展望

日本呼吸器学会50周年記念誌 P. 107-114, (社)日本呼吸器学会「50周年記念誌」作成

ワーキンググループ

**4. 井上義一**

特発性肺線維症の新たな治療薬の開発

日本呼吸器学会50周年記念誌 P. 115, (社)日本呼吸器学会「50周年記念誌」作成ワーキンググループ

**5. 井上義一**

リンパ脈管筋腫症. 看護学テキスト疾病と治療IP. 94, 南江堂

**日本文総説****1. 井上義一**

稀少肺疾患に対する薬剤開発の現状と課題

THE LUNG perspectives 18 : 49-51, 2010.

**2. 井上義一**

特発性間質性肺炎の分類と問題点

新規概念の展開

治療 44 : 16-20, 2010.

**3. 貫和敏博, 杉山幸比古, 井上義一, 吾妻安良太**

新しい時代に入った肺線維症治療, 間質性肺炎と肺線維症

治療学 44 : 87-93, 2010.

**4. 杉本親寿, 井上義一**

乳び胸, 診断, 治療と病態

呼吸器内科 17 : 398-404, 2010.

**5. 井上義一**

肺胞蛋白症病態解明への新展開 (up-date)

成人病と生活習慣40 : 704-707, 2010

6. 広瀬雅樹, 井上義一

リンパ脈管筋腫症に関する分子生物学的解析

最新医学 65 : 2102-2110, 2010

7. 井上義一

特発性間質性肺炎の診断と治療

大阪府薬剤師雑誌61 : 61-66, 2010

8. 井上義一

LAMの内科的治療と管理わが国の手引きと欧州呼吸器学会ガイドライン

呼吸と循環 58 : 1217-1224, 2010

その他

1. 井上義一

4-2. 症例群 (2)

平成21年度環境省委託業務被認定者等に関する医学的所見に係わる解析調査報告書  
石綿小体等計測技術の普及啓発に関する調査（神山班）平成22年3月P. 10～P. 14

2. 審良性則, 井上義一, 北市正則, 山本 晓, 新井 徹, 豊川和成, 坂谷光則

線維化性特発性間質性肺炎 (UIP, NSIP) の高分解能CT所見：肺気腫合併の影響  
厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業

びまん性肺疾患に関する調査研究班平成21年度研究報告書 P. 175～P. 177. 平成22年3月

3. 審良性則, 井上義一, 田中 熱, 好田 寿, 新井 徹, 坂谷光則

慢性閉塞性肺疾患患者の3次元CTによる気腫定量評価

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業

呼吸不全に関する調査研究班平成21年度研究報告書 P. 212～P. 215. 平成22年3月

4. 井上義一, 広瀬雅樹, 松室昭子, 佐々木由美子, 新井 徹, 杉本親寿, 橋 和延, 岩城洋子, 中川美紀子, 上田来未子, 審良性則, 北市正則, 坂谷光則

リンパ脈管筋腫症に関する研究等

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業

呼吸不全に関する調査研究班平成21年度研究報告書 P. 298～P. 300. 平成22年3月

5. 安藤守秀, 白木 晶, 安部 崇, 進藤 丈, 片岡竹弘, 平山晃介, 山口 均,

坂谷光則, 井上義一, 鈴木克洋

集中治療室における急性期肺理学療法の現状

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業

呼吸不全に関する調査研究班平成21年度研究報告書 P. 288～P. 291. 平成22年3月

## 6. 井上義一

国立病院機構近畿中央胸部疾患センターにおけるリンパ脈管筋腫症に対するsirolimusの有効性に関する国際他施設共同試験（MILES trial）の進捗状況

厚生労働科学研究費補助金臨床試験推進研究事業

シロリムスによるリンパ脈管筋腫症の第Ⅲ相国際共同臨床試験 MILES trial に関する研究2009年度分担研究報告書平成21年度総括分担研究報告書 P. 8～P. 10. 平成22年5月24日

## 7. 井上義一, 広瀬雅樹, 松室昭子, 新井 徹, 杉本親寿, 西山明秀, 佐々木由美子, 橋 和延, 源誠二郎, 岩城洋子, 杉山和哉, 中川美紀子, 廣畠和弘, 審良正則, 北市正則, 林 清二, 岡田全司, 坂谷光則

リンパ脈管筋腫症日本人患者に於ける血清Vascular Endothelial Growth Factor-Dの測定

厚生労働科学研究費補助金臨床試験推進研究事業

シロリムスによるリンパ脈管筋腫症の第Ⅲ相国際共同臨床試験：MILES trial平成19年度～平成21年度総合研究報告書 P. 20～P. 23. 平成22年4月

## 8. 井上義一, 広瀬雅樹, 松室昭子, 佐々木由美子, 新井 徹, 杉本親寿, 橋 和延, 岩城洋子, 中川美紀子, 上田未来子, 審良正則, 北市正則, 坂谷光則

リンパ脈管筋腫症に関する研究等

厚生労働科学研究費補助金臨床試験推進研究事業

シロリムスによるリンパ脈管筋腫症の第Ⅲ相国際共同臨床試験：MILES trial平成19年度～平成21年度総合研究報告書 P. 36～P. 38. 平成22年4月

## 9. 井上義一

『肺胞蛋白症の難治化要因の解明と診断, 治療, 管理の標準化と指針の確立』(課題番号H21-難治一般-161)

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業

肺胞蛋白症の難治化要因の解明と診断, 治療, 管理の標準化と指針の確立に関する研究班平成21年度総括・分担研究報告書 P. 1～P. 8. 平成22年3月

## 10. 井上義一

『肺胞蛋白症の難治化要因の解明と診断, 治療, 管理の標準化と指針の確立』(課題番号H21-難治一般-161)

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業

肺胞蛋白症の難治化要因の解明と診断, 治療, 管理の標準化と指針の確立に関する研究班平成21年度研究報告書 P. 1～P. 8. 平成22年3月

## 11. 井上義一

『肺胞蛋白症の診断基準と診断のアルゴリズム』

厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業  
肺胞蛋白症の難治化要因の解明と診断、治療、管理の標準化と指針の確立に関する  
研究班平成21年度研究報告書 P. 17～P. 18. 平成22年3月

## 市立宇和島病院

### 英文原著英文

1. Ogimoto A, Okayama H, Nagai T, Ohtsuka T, Suzuki J, Inoue K, Nishimura K, Saito M, Shigematsu Y, Hamada M, Miki T, Higaki J.  
Pharmacogenetic interactions between angiotensin-converting enzyme insertion/deletion polymorphism and response to cibenzoline in patients with hypertrophic cardiomyopathy.  
*J Cardiovasc Pharmacol* 55 : 506-510, 2010  
(Feb 20. [Epub ahead of print] PMID : 20179607)

### 日本文著書

1. 濱田希臣  
高血圧性心疾患  
“循環器ノート”  
総監修：永井良三，編集：許俊銳，川名正敏，長谷川昭，廣井秀雄，三田村秀雄，山下武史  
診断と治療社，757-759, 2010.

### その他

1. 濱田希臣  
若手医師奨励“宇和島賞”について  
南予医学雑誌 11 : 93-94, 2010.

## 松山赤十字病院

### 日本文著書

1. 村上一雄  
これから始める腎高血圧内科ハンドブック  
遺伝する腎臓病は  
真興交易(株)医書出版部, 東京, pp200-201, 2010.

日和田邦男

日本文総説

1. 日和田邦男

レニン阻害薬

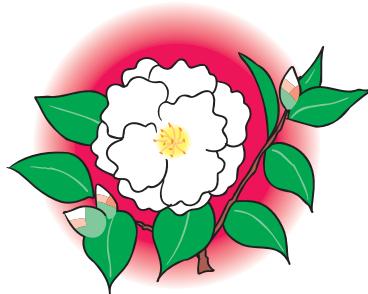
総合臨牀 59 : 86-91, 2010.

その他

1. 日和田邦男

糖尿病, 冠動脈疾患を合併する高血圧の降圧目標

血圧 17 : 818-819, 2010.



## 新入医局員

〔自己紹介文〕

### 飯 尾 千春子

本年度より第二内科に入局致しました飯尾千春子(ちはるこ)と申します。この場をお借りして新入局のご挨拶をさせて頂きます。

私は兵庫県神戸市で生まれ育ち、親和女子高等学校を卒業し高知医科大学（現在の高知大学医学部）へ進みました。研修先を決める際、神戸に帰ることを最後の最後まで考えたのですが…2009年4月、愛媛おりました。というのも大学卒業と同時に同級生と結婚し、主人の地元である愛媛にやってきたからです。そして、あれほど研修先をどうするか悩んでいた学生時代を懐かしむ暇もなく第二内科での研修が始まりました。医師として「ピカピカの一年生」である私にとって毎日が思い出と申し上げても過言ではないくらい色濃く、そして素晴らしい経験でした。腎・高血圧、呼吸器、循環器を並行しての研修で得たものは非常に多い一方で、分からぬこともたくさんありました。そこに興味をひかれ、入局を決意した次第であります。

幸い、同期入局者も多く賑やかな後期研修をさせて頂いております。患者さんに寄り添い、訴えに真摯に向き合える医師になりたいと考えています。また、私は今春より大学院に入学致しましたので、研究や論文作成にも取り組んで参ります。初めてのことが多く、不安も多いのですが「為さねば成らぬ何事も」の精神で頑張ります。

なお、私事ではありますが第一子を授かり子育てにも奮闘する毎日ですが檜垣先生をはじめとして諸先生方に力強く支えて頂いており本当に感謝しております。子供の成長のスピードに驚かされておりますが私自身も着実に成長できるよう日々努力して参ります。今後ともご指導ご鞭撻下さいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

### 仙 波 真由子

本年度より愛媛大学医学部附属病院第二内科に入局し勉強させていただいております。私は今から約8年前に地元愛媛の松山東高校を卒業し、愛媛大学医学部に入学しました。6年間の大学生活の間に、地元での医療に携わりたいという気持ちが強まり、2年前に愛媛大学付属病院での研修をスタートしました。

子供のころから喘息持ちだった私は、呼吸器内科医に憧れを抱いていて、昔自分が助けられたように、いつか自分も人を助けられる医者になれたらいいと漠然と思って

いました。実際に臨床の現場に出ることで呼吸器内科がもつ魅力をますます実感するとともに、医師の世界の厳しさを感じ、自分の考えの甘さを痛感し、憧れの気持ちのままに内科医になっていいのだろうかと悩んだ時期もありました。しかし先生方の診療に対する真摯な姿を見るたびに、やはり自分は呼吸器内科医として、この現場で働きたいという思いが強くなり、現在第二内科へ入局し勉強をさせていただいている。

まだ今年4月からの短期間ではありますが、呼吸器内科医として送り始めた診療の毎日は、非常にやりがいに満ちており、密度のある、充実した日々を送らせて頂いています。しかし時に壁にぶつかり、道に迷うこともある私に対して、呼吸器をはじめとする第二内科の先生方は温かな目で見守り、時に手を差し伸べて下さいます。そんな先生方の背中を見つめながら、最新の医学を学べるというこの環境に身を置ける機会を与えていただけたことに、大変感謝しております。

知識も経験も不十分ではありますが、日々意欲を持って臨床に取り組み、地元に貢献できる臨床医を目指し、努力していきたいと考えております。ご迷惑をおかけすることも多々あるとは思いますが、今後ともご指導ご鞭撻のほどを宜しくお願ひ致します。

## 村上千佳

はじめまして。本年度より第二内科循環器グループで働かせて頂いております、村上千佳と申します。私は松山東高校、島根大学医学部を卒業後、2年間の愛媛大学病院での研修を経て第二内科に入局しました。小さい頃から‘何でもいいから人の役に立つことをしなさい’と言われ漠然と世の中のためになる仕事につきたいと思っていました。中学2年生の時、眼科の女医さんに憧れて医師になりたいと思うようになりました。循環器内科医を志したのは研修医1年目の冬に第二内科で研修させて頂いてからです。患者さんの全身を診るという内科の面白さを知り、患者さんと接することで多少忙しくても働けるものだと感じました。中でも心エコーや心カテで見る動く心臓がとても魅力的で、検査から治療まで様々な手技を持つ循環器内科に決めました。第二内科の先生方の熱心な診療態度やご指導、一方で充実した家庭生活を送っておられるのを見て、一緒に第二内科で働きたいと思うようになりました。

循環器グループの一員となり働き始めて8ヶ月が経とうとしています。エコーで弁膜症や冠動脈血流を評価できるようになったり、穿刺が上手くいくようになったり、心電図やE P Sの電位が少し理解できるようになったりと…4月の私より進歩した自分がいます。まだまだ知識も技術も未熟な私ですが、指導医の永井先生をはじめ循環器グループの先生方にいつも温かく見守って頂き、熱くご指導して頂いており、日々楽しく働いています。これからも患者さん一人一人をしっかり診て最善の医療を提供

できるよう邁進していきたいと思います。また女性医師として、今年一児の母となつた同期の飯尾先生を筆頭に、女性医師が結婚・出産・子育てをしながら働いていけるような環境を作つていけたらいいなと思います。

最後になりましたが、檜垣教授をはじめ諸先生方のお導きで第二内科の一員となれたことをとても嬉しく思っています。深く感謝申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻の程、宜しくお願ひ致します。

## 原 佳世

---

本年度より第二内科、循環器グループに入局しました、原 佳世と申します。

愛媛大学医学部卒業後、初期研修を1年目済生会松山病院、2年目大学病院で研修し、本年度4月から7ヶ月間大 学病院第二内科で勤務した後、11月からは愛媛県立中央病院循環器科で勤務しております。

2年間の研修中、様々な施設で第二内科の先生方が非常に熱心にご指導下さり、学生時代には全く考えていなかった循環器科に興味を持つことができました。循環器内科医となって半年が過ぎましたが、まだまだ不慣れなことが多く、周りの先生方にご迷惑をおかけするばかりですが、私自身は熱い第二内科の先生方と刺激的な毎日を送ることができ、非常に充実しております。

これから知識と経験をしっかりと身につけて、少しでも早く愛媛の内科医として戦力になれるよう日々邁進して参りますので、よろしくお願ひ致します。

## 山 本 将一郎

---

本年度より第二内科に入局し呼吸器グループに所属させて頂いております、山本将一郎と申します。私は愛媛県八幡浜市の生まれで、八幡浜高校、愛媛大学医学部を卒業し愛媛大学医学部附属病院で二年間の卒後臨床研修をさせていただきました。

私は一年目の冬に第二内科（2号館5階病棟）で研修させていただいた際に入局を決めました。専門分野を決めるにあたっては医学生の頃から思い悩んでいたのですが、やはり自分は内科医になろう、とこの時期決心いたしました。それは直接ご指導賜りました伊東亮司先生、三好賢一先生、西村和久先生をはじめとする、患者さん方と真摯に向かい合う先生方の背中を見て、自分もここで働きたいと強く思うようになった次第です。

自らの適性や資質が内科医に向いているかどうか思い患つた日もありましたが、まずは内科医を志したその上で、自分の出来る事をやっていこうと考えました。その時点では、まさか自分が同期入局員の中で黒一点になるとは思いもよませんでしたが。

二年間の研修を終えて今年の四月から呼吸器内科の一員として働き始めました。患者さんから学び、先生方から学び、学ぶ楽しみを覚えると同時に、患者さんの前に立つ緊張感に身の引き締まり続ける日々です。指導医の三好誠吾先生、片山均先生方から見れば医師としても社会人としても様々な面で未知、未熟の点が多いかと存じます。至らぬ点は厳しくご指導いただきながら、一日でも早く先生方のお役に立てるよう努力して参ります。

また私事ですが10月1日に結婚し家庭人としても新たなスタートを切る事になりました。披露宴では檜垣教授から有り難いご挨拶をいただきまして、妻と共に非常に感謝しております。お祝いの言葉を賜りました先生方に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

最後になりましたが、諸先生方が築いてこられた第二内科の歴史と伝統に恥じぬよう、一人前の内科医を目指し日々精進いたします。今後ともどうぞご指導ご鞭撻のほどを宜しくお願い申し上げます。



## 生まれました!



平成23年4月9日に生まれた娘の遥です。  
よだれの量までパパ似です。  
人見知りが激しく、ママはなかなか仕事復帰ができません。

愛媛大学大学院 病態情報内科学

**三好 誠吾, 三好 愛**





2011年1月6日に長男浩太朗（こうたろう）が生まれました。私のお腹にいる時から第二内科の先生方にかわいがって頂いております。今後ともどうぞよろしくお願ひ致します。

愛媛大学大学院 病態情報内科学  
飯尾 千春子



2011年8月26日に長女 梨花（りか）が生まれました。笑顔の多い家庭になればと思っています。同窓会の先生方、今後ともご指導のほどよろしくお願ひします。

愛媛大学大学院 病態情報内科学  
城徳 昌典



## 編 集 後 記

今年の重大事と言えば間違いない未曾有の大災害となった東日本大震災とそれに引き続いて起こった福島の原発事故でしょう。これまでの自然や科学技術に対する認識が一変した出来事だったのではないかと思います。被災されました方々に謹んでお見舞い申し上げるとともに、一刻も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

お忙しい中、依頼原稿を執筆いただいた上村先生を始め諸先生方、河野先生のダブル受賞のお祝いを寄稿してくださった日和田先生、おかげさまで今年も無事同窓会ニュースを発行することができました。どうもありがとうございました。今後ともよろしくお願ひいたします。

広報委員 片山 均, 井上 勝次, 川上 秀生, 岩田 猛